

主 題：生きている信仰と死んでいる信仰 2

聖書箇所：ヤコブの手紙 2章21－26節

ヤコブは非常にショッキングな質問をしました、「信じるだけで本当に救われるのか」と。信じると言ったから、信じる祈りをしたからそれで十分、行ないがあろうとなかろうと、罪を犯していても平気、私は救われているのだから、とこのように主張する人たちに対して、ヤコブは「本当ですか？」と問い掛けるのです。彼は2：20で「ああ愚かな人よ」と言いました。それは彼らが罪からの救いに役に立たないものを信じていたからです。永遠のいのちを望んでいながら永遠のいのちを得ることのできないものを信じて、それで大丈夫だと思い込んでいた、だから、ヤコブは「愚かだ」と言ったのです。

「愚か者」といったときに思い出すイエスが話された一つの話があります。ある金持ちが自分の畑が豊作になって、もっと大きな倉を建ててそこに自分の穀物や財産をしまっておこうとしました。そして、自分のたましいに「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」と言います。もう十分に必要なものが備えられたと。そのとき神は彼に言われます。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」と、そして、イエスはその後で「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」と言われました（ルカ12：16－21）。神の前に賢い人というのは、この神が備えてくださった本当の救いを自分のものとする人です。罪の赦しをいただく者です。愚かな者というのは、救いが備えられているにも拘わらず、それをみすみす逃してしまう者です。ヤコブはその教会の中に、信じていると言っているが、実は心がまだ神の前に閉ざされて救われていない人々がいることを知っていたのです。彼らに対して問い掛けるのです。信仰とはいったいどういうものなのか？信仰はどのような働きを為すものなのか？本物の救いをもたらす信仰とはどういうものなのか？これらのことをヤコブは教えているのです。

前回、私たちは「死んだ信仰」について見ました。こんな信仰は人を救わないということを見たのです。今日は21節から「生きた信仰」についてごいっしょにみことばを見て行きます。救いをもたらす信仰、それはどういう信仰なのでしょう？

☆生きている信仰 21－26節

ヤコブは「生きている信仰」を教えるために、ここで二人の人物を挙げています。一人はアブラハムであり、もう一人はラハブです。

1. アブラハム 21－24節

読者たちが尊敬したアブラハムのことが21－24節に記されています。アブラハムは本物の信仰をもっていた、本当の救いを得ていたとヤコブは訴えます。その証拠がここに記されているのです。イサクをささげたというできごと、これが彼の信仰が本物であったことを証するのだとヤコブは言います。

「：21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。：22 あなたの見ておるとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、：23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。：24 人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」

21、24節に「人は行ないによって義と認められた」とあります。ヤコブは人は行ないによって救いを得るのだということを教えているのでしょうか？行ないがなければ罪の赦しを得ることはないと教えているのでしょうか？もしそうだとすれば、彼の教えは聖書の教えに矛盾しています。ヤコブはそんなことを教えてはいません。ここで彼は何を言いたかったのでしょうか？21－24節でヤコブが強調して言いたかったことというのは、アブラハムがイサクをささげたというできごとです。ですから、この箇所は時間の経過とともに記されているものではありません。というのは、21節にあるアブラハムがイサクをささげたできごとは創世記22章に出てくる話です。そして、23節に書かれている「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」は創世記15章にあります。なぜ、ヤコブは時間の経過通りに記さなかったのでしょうか？それは彼が、創世記15：6のみことば「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」を引用した23節「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」、そのことを今から話すというのではなく、アブラハムがイサクをささげたこと、ここから話をしたかったからです。これがヤコブが人々に伝えたかったことだからです。

もちろんヤコブは、人は信仰によって救われるということを信じていました。もうすでに学んできま

したが、1：18に「父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。」と記されている通り、神が働いて神が私たちを救ってくださったのです。ヤコブが行ないによって救いを得るのではないことを教えていることは疑う余地のないことです。しかも、23節に「**その信仰が彼の義とみなされた。**」と彼が記しているところから見ても、ヤコブははっきりと罪の赦しは信仰によって与えられるのだということを教えているのです。

創世記15章に記されていること、神はアブラハムに約束を与えました。しかし、アブラハムは年老いていましたから、子どもが生まれるという約束を聞いてもそんなことは私には不可能だと思いました。そこで神はアブラハムを外に連れ出してこのように言います。「5…「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」と。ありえないこと、そんなことは不可能だと思うのがふつうです。しかし、アブラハムは（この当時はアブラムでしたが）ここで神のおことばを聞いたとき、彼は神を信じるのです。ですから、15：6で「**彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。**」と記されているのです。不可能と思えることであっても、人間的に見てありえないことであっても、神がいわれたから彼はそれを信じたのです。この当時、私たちが手にしている聖書があったわけではありません。そのようなものは存在していませんでした。神のことについては恐らく彼より私たちの方がよく知っているでしょう。これら神の啓示をいただいているのですから。けれども、アブラハムは示されたことの中で神を信じたのです。その信仰によって彼は救いに与ったのです。

パウロもこのアブラハムのできごとを用いて、救いは信仰によって与えられるということを教えています。ローマ4：1－5を見てください。「**それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。2 もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。4 働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。**」、パウロは創世記15章の話を用いて、アブラハムも神を信じたその信仰によって救われた、旧約の時代も新約の時代も同じなのだとすることを明らかにするのです。ですから、聖書を見たとき、罪の赦し、永遠のさばきからの救いというのは、信じる信仰によって与えられるのです。ですから、ヤコブは決して信仰ではなくて、行ないによって救いを得ることができると教えていたのではないのです。彼が教えることはこれまでもそうでしたが、本物の信仰には必ず行ないが伴うのだということです。それがここでのメッセージです。どうしてそう言えるのでしょうか？まず一つ目はこのことばの意味です。

21節に「**義と認められた**」とあります。24節にも「**義と認められる**」ということばがあります。もちろんこれは、正しいと宣言する、義なる者と神が宣言してくださる、聖い神が、私たち罪人が神が備えてくださった救いを受け入れるなら、神は私たちを神の前にあなたはきよいと宣言してくださる、あなたは罪赦されたと宣言してくださる、これが救いです。確かにその意味がありますが、それだけではないのです。「正しいと表示する、正しいと証明する」という意味も含んでいることばです。そして、ヤコブがここで使っているのは、後のほうです。ですから、行ないによって彼はもうすでに義とされた、正しいとされていたことが証明されたのであるということをヤコブはここで言わんとしたのです。これがヤコブが言いたかったことであるということが、彼の記したみことばの中に繰り返し出てきます。

23節を見ると「**そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、**」とあります。この「**実現した**」ということばは「満たす、完成する、果たす」という意味です。そして「**聖書のことば**」とは23節に記されている創世記15：6のみことばを指すのです。それが完成した、それが満たされた、果たされたのだとヤコブはここで言うのです。アブラハムが神を信じたとき、その信仰が彼を救いへと導きました。彼はまだ何の行ないもしていませんでした。割礼も受けていなかった、何の行ないもなかったときに、彼は神を信じてその信仰によって、神は彼を義なる者と宣言してくださったのです。そのことが、さきほど見たローマ4章でパウロが教えたことなのです。その信仰によってアブラハムは神の前に義と宣言されたのです。これが救いです。

しかし、このヤコブの2章を見ると、最初に言った通り、ヤコブがここで強調したかったことは、アブラハムが神を信じて義と認められた、正しいと宣言されたということではなくて、アブラハムが神の命令に従って、自分の愛するひとり子イサクを殺そうとした、そのことなのです。そこでそのできごとをもう一度思い出すことが必要です。創世記22章、アブラハムは神によって試練を受けます。モリヤの山に彼らは登って行きます。そして、その山の上で全焼のいけにえとしてイサクをささげなさいと、これが神の命令です。イサクは不思議に思いました、お父さん、いけにえはどこにあるのですかと、神ご自身が全焼のいけにえを備えてくださるのだと言いながら進んで行きます。そして、告げられた場所に着いたとき、アブラハムはそこに祭壇を築きました。そこにたきぎを並べ、イサクを縛ってその上

に置くのです。アブラハムは手を伸ばし、刀をとって自分の子をほふろうとした、そのとき「11「主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにあります。」12御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」と。ヤコブはこのできごとを引用したのです。ヤコブはこの行ないによって義と認められたと言いました。創世記15章とここが違うところは、アブラハムの信仰が神の前で義と認められたというのではなく、主の使いがそのように宣言したのです。主の使いがそのように語ったのです。つまり、15章のところはアブラハムが神の前に義と認められたということ、22章では彼の義、彼がきよく正しく救われたということが神の前ではなくて、人々の前に明らかにされているのです。この違いを私たちはしっかり覚えておかなければなりません。救いというのは神の前に新しい立場が与えられたのです。神の前に立つ者に変えられたのです。イサクをささげたことはそのことが起こったと言っているのではないのです。それは、彼が救われていることを主の使いが人々の前で明らかにしたのです。だから、主の使いが告げたのです、「あなたが神を恐れることがよくわかった。」と。ですから、神の前で認められたできごとと人前で認められたできごとと、この二つのことがアブラハムの生涯に起こっているのです。神の前で認められたできごとは救いのこと、人前で明らかにされること、それは彼自身が救われているということを神が神の方法で明らかにされたのです。だから、ヤコブは23節に「…という聖書のことばが実現し、」と受身で書きました。神はアブラハムを救い、それが人々の前に明らかにされることによって彼が本当に救われていることが証明されたのです。そして、そのことは神がなさったのだと言います。本当の救いは神が与えてくださるものです。そして、神がその人を救ったなら、間違いなく神はその人が救われていることを行ないによって明らかにして行かれるのです。神はこのような働きをなさるのです。これが本物の信仰なのです。そのことを考えると、神が自分をどのように変えて行ってくくださるのかという期待が私たちの心を満たして行きます。

アブラハムは神を信じた、そして、彼は私たちがまねのできないようなことをしましたが、それは神がそのようにさせてくださったのです。何のためにでしょう？その救いが本物であることを神が証するためです。ですから、神は私たちのうちに働き続けてくださって、私たちのうちにある救いが本物であることを、私たちの行ないを通して明らかにして行こうとされているのです。

アブラハムは創世記15章のところでは、神の約束を聞いても希望をもっていませんでした。しかし、神を信じました。そして、22章では自分には希望があるということをイサクをささげるという行為をもって明らかにしたのです。アブラハムはイサクを殺そうとしたのです。刀を振り上げたのです。当然考えたでしょう、イサクを殺したらどうなるのかと。彼が思ったことは、たとえここでイサクを殺したとしても、神は神の約束を必ず成就なさる、それはこのイサクを通して子孫が増やされて行くことである、だから、たとえ私がここで神の命令に従って彼を殺したとしても、彼は必ず神によってよみがえり、そして、神は彼を通して約束を成就なさると、それがアブラハムの信仰だったのです。希望のなかった者が希望をもっているということをその行為によって明らかにしたのです。そのように神がアブラハムを変えてくださったのです。ですから、パウロはローマ4章で「どうすれば罪人が救われるのか」ということを教え、ヤコブは「どうすれば救われたことが人々の前に明らかになるのか」を教えているのです。ですから、ある人たちがパウロの教えとヤコブの教えは矛盾していると言うかもしれませんが、みことばを見たとき何の矛盾もありません。救いは信仰によって与えられます。そして、救われた者には必ず証拠としての行ないが伴ってくる、これがこのみことばが私たちに教えることです。

ヤコブはこの2章のみことばの中で「生きた信仰者の特徴」を三つ挙げています。

◎本物の信仰を持っている人の特徴

(1) 善行への渴望をもっている

主の前に正しいことを行ない続けて行きたいという思いを持っている人です。22節に「あなたの見ていとお里、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、」と記されています。読者たちはアブラハムのことをよく知っていたのです。時代は違ってもまさに見ているように彼らはアブラハムのことがよく分かっていたのです。そして、ヤコブは言います、「彼の信仰は彼の行ないとともに働いた」と。この「働いた」ということばを見てみると、このことばの時制によれば、これは「継続して繰り返された働き」であると言っています。ですから、イサクをささげたという1回きりの行ないを教えているのではなく、このように神の前に正しいこと、神の命令されたことに忠実に従って行こうとする、この彼の行動は彼の生き様そのものであったというのです。本当に救われた人は正しいことをして行こうという願いを持っています。神の前に喜ばれることをして行こうという願いです。もちろん、アブラハムの生涯を見ると、彼は神の前に罪を犯しています。私たちと同じように罪人です。しかし、彼の生き様をヤコブは私たちに教えてくれるのであって、少なくとも彼は常に神の前に正しいことを行なって行きたいという

願いをもって、そのように歩もうとしていた、それがアブラハムの特徴だったと言うのです。ですから、それを見るとき私たちは、彼のうちには本当の信仰が存在していたと言えるのです。

(2) 成長への渴望をもっている

22節の後半に「**信仰は行ないによって全うされ、**」とあります。このようなみことばを見ると、何か不完全な信仰が行ないによって完全なものになって行くと思えるのですが、ヤコブはそのようなことを教えているのではありません。この「全うする」ということばは「成長させる、その目標に到達させる」という意味があります。ですからヤコブが言うことは、信仰というのはその行ないによって成長して行くのだということです。まさに、アブラハムの信仰の歩みを見たときに、私たちはそのように言えるのです。イサクをささげるという大きなできごとを神は試練として与えた、それはそれによって彼の信仰が成長するためです。私たちの信仰も同じです。いろいろ試練を神はくださり、その試練の中にあって私たちが正しいことを選択して行くなら、その中でしっかり神を見上げて神のみこころに従って行くなら、それは間違いなく私たちの信仰を成長させる機会となって行きます。アブラハムはそのようにして成長して行ったのです。私たちも同じように神が救ってくださったなら、私たちの心の中に「神さま、私はもっとあなたに喜ばれる信仰者にならなりたいです。」という願いを神は与えてくださいます。そして、神はみことばをくださった、聖霊をくださった、信仰の友をくださった、そうして私たちは神のみこころに従って行こうとするわけであり、それによって神は私たちを成長させてくださるのです。そして、22節の「**全うされ**」も実は受身で書かれています。神が成長させてくださるということです。そのことを私たちクリスチャンはしっかり覚えておかなければいけないのです。自分が頑張ることによって信仰が成長するのかというと、必ずしもそのようなことで成長するわけではありません。もちろん、私たちは実践して行こうと最善の努力を払うのですが、私たちが頼らなければいけないのは、自分の力や知恵ではなくて、それを実践させてくださる神のみ力に、恵みにです。神さま、私はもっと成長したいです、だから、私はあなたのみことばを学び、あなたのみこころを知り、それに従って行きたいです、どうぞ、私を助けてください、私を変えて行ってくださいと。アブラハムを成長させて行ったのは神です。私たちの信仰を成長させて行ってくださるのも神です。本当に救われている人、生きた信仰者というのは成長への渴望があるのです。

(3) 交わりへの渴望をもっている

神との交わりです。アブラハムは23節にあるように「**彼は神の友と呼ばれたのです。**」でした。神はアブラハムとの親しい交わりを楽しまれたのです。彼は信頼されたのです。そして、何と神は私たちクリスチャンを「わたしの友」と呼んでくださるのです。ヨハネは「**わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。**」(ヨハネ15:14-15)と記しています。私たちが考えなければいけないことは、神は私たちを信頼してくださっているかということです。こんなすばらしい特権に私たちは与ったのです。神の敵であった私たちが神の一方的なあわれみによって救い出されて、神は私たちを友と呼んでくださっている、それほど親しい交わりに神は私たちを置いてくださったのです。ただ知っているというのではありません、友だちなのです。どうでしょう？私たちの歩みは神を裏切り続けていないでしょうか？神を失望させたり落胆させたり連続ではないでしょうか？アブラハムが望んだことは神との親しい交わりです。彼は神との交わりを楽しみ、神もアブラハムとの交わりを楽しんでくださった、私たちも神との交わりの時間を楽しんでいるでしょうか？それとも、それ以外のことに関心をもっていませんか？日曜日に教会に来たから、一日に10分、15分、みことばを読んだから、もうそれで神との時間は十分、それで終わりと…。神は友と呼んでくださった、全能者なる主権者なる方が友と呼んでくださったのです。私たちはこの主に対してどのような歩みをもって、このすばらしい神のくださった特権に対する感謝を表わしているのでしょうか？

⇒アブラハムはこのような人物でした。彼はこの行ないをもって彼の信仰が本物であることを明らかにしたのです。そして、ヤコブはそのことを通して読者たちに、アブラハムの信仰を見てご覧なさい、彼の信仰には行ないが伴っていた、だから本物なのだと訴えるのです。

25節を見ると、もう一人の人物ラハブのことが出てきます。

2. ラハブ 25節

「**同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行ないによって義と認められたではありませんか。**」と記されています。ヨシュア記2章に出てくることです。彼女はエリコという町に住んでいました。ここにある通りエリコの遊女でした。恐らく彼女は宿を経営していたのでしょう。だから、ヨシュアに送られた二人のスパイたちがここにやって来たのです。今、エリコに行くと遺跡が残っていますが、当時のことはそれから窺い知ることはできません。この当時、エリコの町には二重の

城壁があったのです。この二つの城壁の間隔は大体4.5メートルありました。その二つの城壁の上に厚い板を敷いて、その上に家を建てたのです。そこにラハブは住んでいたのです。だから、彼女はそこから容易にスパイたちを城壁の外へ送り出すことができました。さて、この二人のスパイがエリコにやって来たときに、エリコの王はイスラエル人のある者たちがこの地に入ってきたということを聞きました。そこで、彼はラハブのところに人をやって、「**あなたのところに来て、あなたの家にはいった者たちを連れ出しなさい。その者たちは、この地のすべてを探るために来たのだから。**」（ヨシュア2:3）と、このようなことが起こったのです。彼女はこの二人のスパイたちをかくまうのです。この行為は非常なリスク、危険が伴いました。それによって、自分も自分の家族も酷い目に会うかもしれない、自分の民を裏切ったということで…。しかし、なぜ彼女はこのようなことをしたのでしょうか？そこがヤコブが言いたいことだったのです。ヨシュア記2章を見ると、彼女は二人のスパイたちにいろいろなことを話して行きます。イスラエルの神がエモリ人のふたりの王に対して何をしたのかを彼女は知っていました。また、紅海を渡ったときの奇蹟のみわざも彼女は知っていました。「**2:10 あなたがたがエジプトから出て来られたとき、主があなたがたの前で、葦の海の水をからされたこと、また、あなたがたがヨルダン川の向こう側にいたエモリ人のふたりの王シホンとオグにされたこと、彼らを聖絶したことを、私たちは聞いているからです。**」。ですから、ラハブはこのイスラエルの神が彼女のこぼれ話を借りるなら「**上は天、下は地において神であられるから**」と、つまり、このイスラエルの神こそまことの神であることを知っていたのです。そして、神がこの地を滅ぼそうとしていること、それも知っていました。そして、彼女は二人のスパイとの会話を通して、自分がイスラエルの神を信じていたことを明らかにするのです。そして、彼女の信仰が本物であった証拠がどこにあるのか、それは危険を冒してまでもこのスパイたちをかくまおうとしたところにあったのです。そしてもう一つ、彼女はスパイたちにこのようなことを言います。ヨシュア記2:12-13「**どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を下さい。:13 私の父、母、兄弟、姉妹、また、すべて彼らに属する者を生かし、私たちのいのちを死から救い出してください。**」と、彼女は自分のことだけでなく、自分の家族の身まで案じたのです。家族も同じように救われて欲しいと願いました。この神によって家族があわれみを受けるようにと望んでいるのです。私たちもイエスを信じたとき、自分は罪赦されて天国へ行けるようになった、それならこのすばらしい救いを自分だけに留めるのではなく、愛する家族もこの救いに与ってほしいと思ったはずです。まさにラハブが願ったように…。それが本物の信仰の証なのです。本当に救いをいただいた者たちというのは、自分が救われてそれでいいとは思わないのです。周りの者が同じように救われてほしいと思うのです。彼女はそういう願いをこの二人に告げたのです。その彼女が行なったことを見ると、彼女はわずかな知識しかなかったはずですが、その中で彼女は主を信じ、このすばらしい救いに与ったのです。彼女は異邦人です。しかし、神はユダヤ人だけでなく、異邦人にも等しくすばらしい救いをくださる、このラハブがどんなに祝されたことでしょうか。彼女はサルモンという人物と結婚します。歴代誌第一のところではサルマとも呼ばれているのですが、そこで生まれた子がボアズです。あのルツの夫です。そして、ボアズからオベデが生まれ、オベデからエッサイ、エッサイからあのダビデが生まれたのです。このように神の祝福はこの遊女であったラハブに及んだのです。

救いとは何とすばらしいものでしょう。私たちの生まれ育った環境も、人種も、民族も、私たちの教育も全く関係ない、私たちが神の前にあわれみを求めるなら、救いを求めるなら、神は救ってくださるのです。私は罪深い者で救いを受ける資格などないと、そんなことは神はご存じです。でも、すごいことは神はそのようなあなたにも救いを備えてくださった、救い主イエスはもうすでに来てくださったのです。そして、救いを成し遂げてくださり、救いを今あなたの前に備えてくださっているのです。

愚かな人というのは、救いがあるのにその救いを受け入れようとしないのです。だから、26節でヤコブはこのように言います。「**たましいを離れたからだ、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。**」。たましいとからだは分離しているとその人は肉体的に死んでいるのです。ヤコブは言います。もし、行ないと信仰とが分離しているなら、その信仰は死んでいると。彼が言いたかったこと、それは神があなたを救ってくださったのなら、あなたは変わることです。神が備えてくださる救いというのは、あなたを本当に罪から、さばきから救うと。どうでしょう？あなたは愚かな者ではないでしょうか？救いのことは知っている、神のことも知っている、しかし、まだあなたの心が神の前に開かれていない…。パウロはテトス1:16でこのように言っています。「**彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。**」と、口ではどのようにも言えます。問題は心です。あなたの信じた救いはあなたに本当の救い、永遠のいのちをもたらす救いでしょうか？そのことをヤコブは私たちに問い掛けるのです。だから、私たちは一人ひとり自らの信仰を吟味することです。人のことはよく分からないけれど、自分自身のことは分か

っています。私たちの信仰が間違いなく、神が教えてくださる生きた信仰であるかどうかを吟味して、もしそうでなければ今、神の救いが与えられるこの日に、それを自分のものにすることです。主の前に救いを求めることです。そして、私たちが本当に救いをいただいているなら、私たちはこのような救いをもたらしにくださったすばらしい救い主のことを人々に伝えることです。本当の生きた信仰、それはあなたを変えます。あなたに救いをもたらします。そして、その救いはあなただけに留まるものではないのです。この1週間もそれぞれのところで、この方こそがまことの救い主であり唯一の希望であることを、声を大にして伝え続けて行きましょう。なぜなら、まだまだ多くの人々が永遠の滅びへと向かっているからです。